



山口ミルコ



YAMAGUCHI MIRUKO

大学卒業後、アメリカの巨大金融グループの一社に就職するも、総合出版社の大物編集長との出会いがあり転職。月刊誌の雑誌編集者として5年。上司の独立にともない新出版社に移り、その創業期より15年にわたりプロデューサー・編集者として勤める。人気作家の小説や人気俳優・ミュージシャンのエッセイ・写真集など書籍編集のほか、雑誌の創刊や映画製作に関わる。また、海外留学旅行社の広報誌の編集長を10年にわたり勤め、英・米・豪・加などへの度々の出張で、海外取材の経験をつんだ。2009年3月に独立。フリーランスとなった矢先に乳がんを発症。3年後、その闘病記を上梓。以降、エッセイ、ノンフィクションを執筆するほか、大学で編集講義をおこなう。近年はロシア極東・シベリア地域に興味を持ち、北方民族などを取材している。

HP：ミルコのミルは平和のМИР <https://yamaguchimiruko.tanomitai-z.com/>

フリーランスという生き方

「職」を通して「生き方」を知る。

今回、お話を伺うのは山口ミルコさん。敏腕編集者として大活躍した山口さんは現在フリーランスだ。会社員時代から現在まで「職」を通して山口さんの生き方を学ぼう。

小学校5・6年ぐらいには

出版社に行くんだと思ってた。

——子どもの頃から出版業界は意識されていたのですか？

そうですね。小学校の卒業文集にみんなで自分の将来の夢を書いたのね。将来こういう人に自分になっていて、その同窓会が何十年後に開かれますよってというコーナーがあって、そこには作家になるって書いてました。自分でお話を書いたり絵を描いたりするのが好きだったからだと思うんだけど、小学校5・6年ぐらいには出版社に行くんだと思ってましたね。とにかくなんらかの形で本という物体の、表現の世界に行きたいなっていう。

——それでは学生の頃には、何かやっていらっしやったのでしょうか？

いえ、大学時代はせっかく英文科に入れたのに、あまり勉強はせず、ジャズの方に没頭してて楽器ばかり吹いてました（笑）就職もあまり考えず、ただ音楽のことを本気で打ち込んでましたね。

でも、千本ノックで練習していたから、すごくエネルギーと時間を使って、一生懸命必死にやった体験は、後々の自分の仕事を助けてくれたので、それはそれでよかったですね。

出版界へ

——それでは出版業界に入るのは就職のタイミングででしょうか？

いえ、最初は外資系保険会社に就職しました。そこでは、会社の一般事務をやってましたね。申込書や書類のチェック、契約書を適切な人に回す、電話を受ける……とかそういうお仕事です。

出版の世界に飛び込むのは、私が演奏をしていたのを見たフリーランスライターの女性の先輩との交流がきっかけですね。その人から見城さん（幻冬舎代表取締役社長・見城徹氏）を紹介していただいて、会ったらすぐ来いって話になりました。なので、会社を退職して見城さんの下に、『月刊カドカワ』の編集部員として出版界に入りました。——急な入社となるわけですが、お仕事はどうでしたか？

まず、会社の外に出るのが楽しかったですね。やっぱり一般事務OLだとずっと社内にいないといけなかったから。外に出ていろんな人に会える。例えばイラストの受け取り、写真の受け取り、先輩の取材に立ち会ったり……。それが面白くてしょうがなくて。

それに短い原稿を書く、タイトルを考える、コピーを書くといった仕事も最初から好きでした。これは気質というか、ある意味才能だったのかも。自分が書いたものを何度も見ちゃうみたいなの（笑）

そんな風に、仕事を新人の頃から楽しんでやっ

ていたから、何度先輩から「やり直し」と言われても苦じゃなかったし、一生懸命やりましたよ。その一生懸命が認められて新しい仕事が増えて、担当ページが増え、人脈も広がりましたね。好きでやっていたら相手も気づいてくれるのよ。だから今日だって川上先生のゼミ生があれだいて、目が輝いている子は分かるもん。だから自分がうまくいってないと思っても、相手が見つけてくれるから。この人すごい好きでやってる、頑張ってる、好きでこの世界に来たんだなど。自分のボスなる人が手を差し伸べてくる。私はそうだった。それでどんな仕事が楽しくなったんだよね。





角川書店に入社し、念願の出版界で働き始めた山口さん。先にも書いたように、毎日のお仕事を楽しんでいらつしやいました。実際当時のお話をされている山口さんはニコニコと笑みを浮かべ、楽しそうにお話してくれました。

しかしながら、山口さんは上司である見城さんの独立に伴い、角川書店を退社、幻冬舎に移られます。

雑誌編集の仕事

辞めたくなかった。

角川から幻冬舎に移られるわけですが、不安はなかったのでしょうか？

今から思ってもあの時もあんまり迷っていなかったかな。新しい会社に行くことに不安はあったけど、それよりも雑誌の仕事、雑誌編集の仕事を辞めたくなかったからね……。さつきもお話したけれどこの仕事が好きでしやうがなかったし、編集者としてもノリにノっていたから。

でもやっぱり一緒にやってきた仲間と別れが辛かったことに変わりはないね。

ただ、見城さんが新しいことを始める、応援している作家もいる。先輩が、仲間が……。そういう人たちとどんどん最初の6冊をもう作っていたから。私も五木寛之さん担当だったし。いろんな人たちが応援してくれて、見城さんを中心とした渦が出来て。私もその渦に入って大変な日々を過ごしていた。だからもうそこからは振り返ることはなかったかな。

その頃に一緒にスタートした仲間とは絆が深まったし、かけがえのない人達として連れ添っていくことになりましたね。

もう編集者はやらない

フリーランスとなつてからも著書である『ミルコの出版グルグル講義』（河出書房新社）の中で「編集」という仕事は面白い仕事第一位だよ」と書かれています。しかしながら、もう編集者はやらないというのは何か理由があるのでしょうか？

それは私の中で編集者という仕事が会社と直結していたからだと思う。

結局出版という事業は一人じゃできないのよ。フリー編集者という道もありうるし、実際に実績を作っていらつしやる方もたくさんいると思いますが、会社においてこそ編集者。仲間がいて、こういう本を出そうというチームがあつて、その人たちと創っていく。その中心に編集者がいる。だから一人でこつこつと本を編む、というのも編集者という仕事ではあると思うけれど、私はやっぱり会社だったんだよね。会社というものを辞めたから、もう編集者はやらない。

幻冬舎を辞めた時にも様々な出版社さんにお声がけしてもらつたけれども、見城さんへの筋というか。見城さんとの縁でこの業界に入つて、丸二十年。見城さんの片腕としての誇りもあつたし、見城さん以外の上司の下で出版をやるつもりもなかった。

幻冬舎をやめる『編集者をやめる。』と決めていた。ここだけの話、嫌な思いもいつばいしたけれども、それを越える、遙かなる恩がある。見城さんの下を離れて、他の会社に行つて、他の人たちと本を作り、他の会社に貢献し……。という気持ちに全くなれなかった。

幻冬舎に移られてからは会社の中心メンバーとして活躍されていきます。

五木寛之氏をはじめとする人気作家の小説や人気俳優・ミュージシャンのエッセイ・写真集などの書籍編集。雑誌の創刊や映画製作、海外留学旅行社の広報誌編集長など幅広い分野を扱う編集者として。

そんな山口さんは2009年に幻冬舎を退社。ここからは退社後、現在までをお聞きます。

会社を辞めた理由

答えづらいかもしれませんが、どうして会社を辞められたのでしょうか？

おそらく絶対的な関係としてやはり見城さんと私、会社と私という中で、私が「もうここまでだな」と思った瞬間があつたんだよね。

最初の本が出た時とか、いろんなインタビューでもよく聞かれた。「なんで会社をやめたんですか？」って。自分で言うのもあれなんだけど、私は幻冬舎のスター編集者だったので……。会社の創業からいたし、代表作をやつたから「ミルコさんがやめるなんて……」と色々言われ、聞かれ……。

色々な人に聞いてもらつたけれども、いつもうまく答えられなくて。もう辞めて何年も経つて、こうして聞いてもらつても未だにちゃんと答えられない。

でもね、私が「なぜ辞めたのか」分かつてしまったらものを書けなくなるかもしれない。なぜ辞めたのかという謎を解いていきたいというかね。それはすごく自分のエネルギーにもなっているから。

あの時に大きな別れがあつたんだよね、きつと。そういうことなんだと思うな。ちよつとうまく答えられ

「ねば」からの解放

会社で働くこと、フリーランスで働くこと。どちらも経験して感じた違いなどありますか？

会社にいた時は「やらなければ」の「ねば」に囚われていたように思う。といつても嫌でやっていたわけじゃない。好きなことをやっていたわけなんですけれど（笑）

見城さんはやりたいことは何でもやらせてくれた人だったから。「君がそう思うならやってみなさい。」という良い上司だった。恵まれていたし、好きなことをやっていたというところではあまり変わっていませんね。

でも、一人ぼっち（フリー）になってみたら今までみたいに周りの人はちやほやしてくれない。会社にいた時は仕事が運ばれてきて、来客もある。モチモチなわけですよ、会社にいたほうが。でもフリーになると気が付いたら、周りに誰もいないみたい……。ただ、その分、天と直結というところとあれかな。「こうやりたい」ということが降りてくるというか、モノ、ところに向かって歩いて行けるような……。会社にいた時よりも原始的でもあるし、人間的でもある。そういうことやっている自分が面白いですね。

そうすると、今の方が楽しい……？

今の方が断然楽しい。

ただ、全部自分がやってきたことだから、やっぱり愛おしいよね、全て。どっちが楽しかった？と聞かれると答えづらいけれど、今の方がより自分の原点に戻る

なくてごめんね。

今考えると「辞めたこと」はきつといいことだったんだと思う。あの別れがなければ今の私はいないわけだし、こうしてインタビューも受けられていなかっただろうし。

本を読んで、今こうしてお会いしてお話を聞いていますと、編集時代よりもいきいきとしているような。楽しいもん。やっぱりビックバンというか、本当に人生の大イベントだったんだよね、会社を辞めたというのは。そこに病気が重なったから大騒ぎなわけよ。

自分の小さな生き物としての大事件。精神的にも肉体的にもバラバラ。そこで一回バラバラになったけれども、心の面も身体も自分でも直していくことで、本を書けたし、新しい出会いもあったりした。文芸編集者をやっていた時には読まなかったような本も読んだりね……。今までやってきていなかったことをして変わつていったんだよね。



だから何度も言うけれど、辞めたのは良いことだったんだと思うよ。今は、幸せいっぱいです。

っている気がします。子どもに近づいているような。そんな感じ。

フリーランスとなつてから大事にしていることはありますか？

フリーランスになつてから大事にしていることは、あまり無理をしないこと。あれもこれもとなつてしまふとあつちもこつちもと考えてしまふから。自分の中心をしっかりとぶれないように肝を坐らせるといふか、そういう感じで仕事に取り組むってことかな。逆にそうしないといつまでたつてもモノにならない気がするね。

最後に山口さんにとって「職」とは？

やつてしまふものだよ。やらないでいようと思つてもやつてしまふもの、向かつてしまふもの。誰かに手を引かれて連れていかれても戻つてしまふような。食べていくことができないからやつてしまふ、必要だからやつてしまふというものもありますが、本能的にそこに戻つてしまふ、私の魂がやることを分かっている、これをやるもんだと認識しているんだと思うんだよね。それだけ私にとって尊いことだということですね。

— ありがとうございました！

☆山口さん著作一覧☆

- 『毛のない生活』（ミシマ社）
- 『毛のカ ロシア・ファードロードをゆく』（小学館）
- 『似合わない服』（ミシマ社）
- 『ミルコの出版グルグル講義』（河出書房新社）
- 『パブル——ボスと彼女のものがたり』

「婦人公論」（中央公論新社）にて連載中。

文・三崎友也

写真・田村みどり（専修大学広報課）